

Title	イールドカーブにおける流動性プレミアムの測定 - ゼロ金利政策下のコール市場において -
Sub Title	
Author	大野正(Oono, Tadashi) 太田康信
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1999
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1999年度経営学 第1494号 連絡が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001999-1494">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001999-1494</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

所属ゼミ	太田 研究会	学籍番号	89828172	氏名	大野 正
(論文題名)					
イールドカーブにおける流動性プレミアムの測定—ゼロ金利政策下のコール市場において					
(内容の要旨)					
<p>本論文において、金利のイールドカーブに存在する流動性プレミアムの測定を行った。流動性プレミアムについては、過去の研究でその存在が認識されていながら、統一的な計測値が求められてこなかった。</p> <p>その原因は、過去の研究が対象としていた市場が、期待理論の前提条件を満たしていないことにあった。特に、主な研究対象である米国債市場において、流動性プレミアムはおろか、利息全体をも上回る手数料、税効果を見逃してきたことで、結果がでないのは当然であった。</p> <p>そこで、本論文では、それらの要因を排除でき、期待理論の前提が成り立つ市場を検討した。その結果、日本のコール市場に的を絞った。</p> <p>そして、現在行われている「ゼロ金利政策のもとでのイールドカーブの形状が、日本のコール市場における流動性プレミアムを示す。」との仮説をとった。</p> <p>以下の3つの方法で流動性プレミアムを計測し、仮説の検証を行った。</p> <p>I. 過去における中央銀行の金利操作の特性から、最適と思われる市場の期待変動利子率を推定し流動性プレミアムを求めた。</p> <p>II. 実際の時系列のデータにより、市場の期待変動利子率を予想し、流動性プレミアムを求めた。</p> <p>III. 流動性プレミアム仮説の定義にのっとり、短期金利の総和と長期金利の差から、流動性プレミアムを求めた。</p> <p>その結果、3方法、共に、現在のゼロ金利政策下のイールドカーブの形状に、ほぼ、等しい流動性プレミアムが計測され、仮説を裏付ける結果となった。</p> <p>また、計測された結果から流動性プレミアムについて、以下の特性が明らかになった。</p> <p>1) 期間に固有であり、期間が長くなればなるほど、大きくなるが、その変化の様式は、期間が長くなるにつれ、変化幅は小さくなる。</p> <p>2) 金利水準の高低や上昇・下降局面に関係なく、ほぼ一定である。</p> <p>3) 利子率が低くなるほど、その利子率に占める流動性プレミアムの割合が大きくなり、ゼロ金利下では、最大(100%)となる。</p>					